

[分類]	普及技術
[成果名]	ブルーベリーバルデンシア葉枯病防除にベンレート水和剤が有効である
[要約]	ブルーベリーバルデンシア葉枯病防除にベンレート水和剤の 3,000 倍液を散布する。
[担当]	果樹試験場環境部、南信農業試験場栽培部
[部会]	病虫部会

## 1 背景・ねらい

ブルーベリーバルデンシア葉枯病は平成 15 年に岩手県において発見された新病害であり、平成 20 年には本県のブルーベリー産地においても発生が確認されている。本病は葉に発生して激しく早期落葉するため、果実品質や樹体への影響が大きい。新病害であるため登録農薬がなく、防除対策がとれない状況にある。

そこで本病に効果の高い薬剤を選定するとともに、ブルーベリーに対する薬害の有無を検討するために、平成 21 年に試験を実施し、平成 22 年にベンレート水和剤が登録されたため、今回普及技術とした。

## 2 成果の内容・特徴

(1) ブルーベリーバルデンシア葉枯病防除に、ベンレート水和剤の 3,000 倍液を散布する。

### 農薬登録内容

ベンレート水和剤

[一般名及び成分含有量] ベノミル 50.0%

[毒性] 人畜毒性：毒物、劇物には該当しない [魚毒性] B類

[対象作物に対する適用登録状況（平成 23 年 7 月 4 日現在 JPP-NET 確認）]

作物名	適用病害名	希釈倍数	散布液量	使用時期	使用回数	使用方法
ブルーベリー	バルデンシア葉枯病 斑点病	3,000倍	200～700L /10a	収穫 7 日前まで	1 回	散布

本試験は純粋に殺菌剤の効果を判定する目的のため、また、適用登録内容が決定される以前に実施したため、散布回数は適用登録の回数を超えた。

## 3 利用上の留意点

(1) 防除等に関する注意事項

- ア 本病は標高が高く冷涼な産地や日当たり、風通しが悪く湿度が高い園地で発生が多い。発生園地では耕種的対策を含め、総合的に防除する。
- イ 発生ほ場における観察では、本病はハイブッシュブルーベリー品種のうち、「アーリーブルー」、「ブルーレイ」、「ジャージー」、「スパルタン」等で発生が多い。
- ウ 伝染環等の発生生態は明らかでないが、前年に発生した樹では翌年も発生が多い。
- エ 本病は葉に発生し、5 月中旬頃に地際部の新梢（吸枝、サッカー 以下、吸枝）で初発生した後、6 月中旬頃に樹冠内の新梢葉に被害が拡大する。
- オ 本病は蔓延してからの薬剤散布では十分な効果が得られないため、発生初期までに散布を行う。また、散布に当たっては吸枝にも薬液が十分かかるよう散布する。
- カ 現時点で本病に対する登録農薬は本剤のみである。多発生ほ場では、罹病吸枝の切除や被害落葉の処理など耕種的対策も含め総合的に防除を行う。
- キ 本病に類似する病害として斑点病がある。バルデンシア葉枯病ではルーペ等を用いて病斑部を観察すると、病斑内に黒褐色の突起物（葉に感染した分生子）が認められる。また、新鮮な病斑上には大きさ約 0.5mm の星形の分生子が数個認められる（平成 20 年度病害虫発生予察特殊報参照）。

(2) 薬剤に関する注意事項

- ア 眼に対して刺激性があるので眼に入らないように注意する。
- イ 皮膚に対して刺激性があるので皮膚に付着しないように注意する。
- ウ 水産動植物（甲殻類）に影響を及ぼす恐れがあるので、河川、養魚池などに飛散、流入しないように注意する。

4 対象範囲

県下全域

5 具体的データ

- (1) ベンレート水和剤のブルーベリーバルデンシア葉枯病に対する防除効果およびブルーベリーに対する薬害について、平成21年に果樹試験場および南信農業試験場で試験した。
- ア 果樹試験場の試験では中発生条件下の試験となった（表1）。ベンレート水和剤の3,000倍液は無処理と比べ高い防除効果であった。
  - イ 南信農業試験場の試験では甚発生条件下の試験となった（表2）。ベンレート水和剤の3,000倍液は無処理と比べ高い防除効果であった。
  - ウ いずれの試験においても薬害は認められなかった。

表1 ブルーベリーバルデンシア葉枯病に対するベンレート水和剤の防除効果（平成21年、果樹試験場）

供試薬剤	希釈倍数	調査葉数	発病葉率 (%)	防除価 <sup>a</sup>	薬害
ベンレート水和剤	3,000	172.0	1.8	93.3	なし
無処理	—	142.5	26.8		

注) 値は2～4反復の平均値（ベンレート水和剤散布区は4反復）  
 a 防除価=100-（無処理区の発病葉率/処理区の発病葉率）×100

試験場所：上水内郡信濃町現地ほ場  
 供試品種：「ジャージー」（約26年生）  
 試験規模：1区1樹、2～4反復  
 薬剤散布：平成21年5月19日、6月3日、6月12日の計3回、動力噴霧器を用いて十分量を散布した（展着剤無加用）。なお、試験開始時にバルデンシア葉枯病の発生は認められなかった。  
 調査：平成21年6月23日に1樹当たり10新梢（吸枝）の展開葉全葉について、発病の有無を調査した。薬害の発生の有無については随時調査した。

表2 ブルーベリーバルデンシア葉枯病に対するベンレート水和剤の防除効果（平成21年、南信農業試験場）

供試薬剤	希釈倍数	調査葉数	発病葉率 (%)	発病度	防除価 <sup>a</sup>	薬害
ベンレート水和剤	3,000	103.0	0.7	0.2	99.8	なし
無処理	—	104.5	95.7	92.8		

注) 値は4反復の平均値  
 a 表1と同じ

試験場所：下伊那郡大鹿村現地ほ場  
 供試品種：「ジャージー」（約20年生）  
 試験規模：1区1樹、4反復  
 薬剤散布：平成21年5月18日、5月27日、6月8日、6月18日の計4回、背負い式動力噴霧器を用いて十分量を散布した（展着剤無加用）。なお、試験開始時には供試樹の吸枝の葉において、わずかにバルデンシア葉枯病の発生が認められた。  
 調査：平成21年5月27日の2回目散布直前に、各区10～20本の吸枝の上下2カ所にラベルをつけ、この範囲の合計約100葉を調査対象とした。7月8日（最終散布20日後）に調査を行い、発病の有無と発病程度（指数0～7）を調査した。薬害の発生の有無は随時調査した。  
**【発病程度の調査基準】**  
 指数0：発病なし、1：1葉あたり病斑が1個、3：2～3個（大型病斑が1個）、5：4個以上（大型病斑が2個以上）、7：落葉  
 発病度=Σ（指数×該当葉数）/（調査葉数×7）×100

## 6 特記事項

[公開] 制限なし。

[課題名、研究期間、予算区分]

果樹の新規農薬等の効果試験（果樹試）、園芸作物の新規農薬等の効果試験（南信試）、平成 21 年度（2009 年度）、民間受託